

K130.11

2

3.4Za



複式編制學校
第三四學年
兒童用乙

尋常小學修身書

文部省

K130.11
2
3.42a
G. 1. 1

複式編制學校
第三四學年 兒童用 乙

尋常小學修身書



文部省

もくろく

第一	おやのおん	一	第十三	皇后陛下 ていか	二十六
第二	かうかう	四	第十四	能久親王 のちひな	二十九
第三	兄弟 きょうだい なかよくせよ	六	第十五	ちゆうくんあいこく	三十三
第四	しごとにはげめ	七	第十六	ちゆうゆう	三十六
第五	しんるゐ	九	第十七	やくそくを守れ	三十九
第六	學問をつとめよ	十一	第十八	しやうちき	四十一
第七	友たちはたすけあへ	十四	第十九	おんをわすれるな	四十三
第八	からだについてのことろえ	十六	第二十	法 はふ 今 け を重 おも んぜよ	四十六
第九	めいしんにおちいるな	十九	第二十一	共同 きょうどう	四十八
第十	そせんをたつとべ	二十一	第二十二	こうえきをほかれ	五十一
第十一	ぎやうぎ	二十三	第二十三	じぜん	五十三
第十二	けんそん	二十四	第二十四	よい日本人	五十七

教育ニ關スル勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ
德ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克
ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セル
ハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實
ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦
相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及
ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器
ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲
ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉
シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キ
ハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ
爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン
斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫
臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬
ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト俱ニ
拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

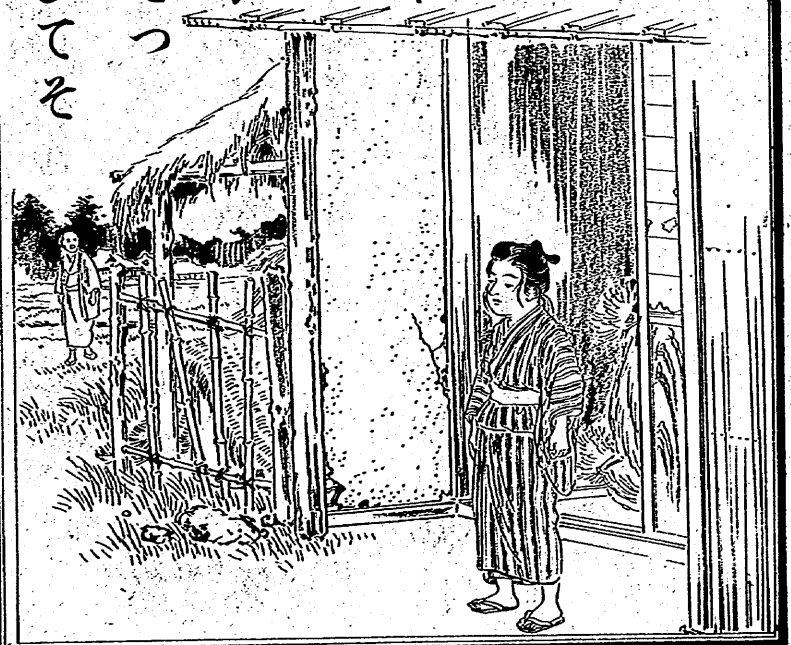
御名 御璽

第一 おやのおん

二宮金次郎の家は大そうびんぼふであつたので、父母は金次郎たちをそだてるために、色々くらうをしました。

ある時父がびやうきになつて、おいしやにかかりました。くすりのおれいが出来ませんので、しかたがなく、でんちを賣りました。びやうきがなほつてから、父はおいしやの

家へおれいに行
き、そのかねを出
しましたがおい
しやはきのどく
に思つて、うけ取
りません。父はお
いしやのしんせつ
をよろこび、しひてそ



の半ぶんをおいてかへりました。その時金
次郎は門口に出て父のかへりをまつてゐ
ました。父はうれしさうなかほをしてかへ
つて来て、金次郎においしやのしんせつを
はなしてきかせ、[「]これでおまへたちをそだ
てる。ことが出来る。」といひました。

父母ノオンハ山ヨリモ高く、海ヨリモフ
カシ。

第二 かうかう

金次郎はかうかうな子で、小さい時から父母の手だすけをしました。

金次郎が十四の時父がなくなりました。母はくらしにこまつて、すゑの子をしんるゐへあづけましたが、そのばんからよくねないでかなしんでゐました。金次郎はこれは母があゝの弟のことをしんぱいして居られ

複乙三四

複乙三四



るからであらうと思ひ、「私がはたらいて弟をやしなひますから、よびもどして下さい」とねがひました。母はその夜すぐにしんるゐの家へ行つて、すゑの子をつれてかへり、おや子いつ

しよにあつまつて大そうよろこびました。

第三 兄弟きやうだいなかよくせよ

それから金次郎は朝は早くから山へ行き、しばをかりたきぎをとつてそれを賣りました。又夜



夜
三
四

はなはをなつたり、わらちをつくつたりして、おそくまではたらきました。

金次郎はこんなにして少しのじかんもむだにせず、よくはたらいで弟たちをやしなひました。

第四 しごとにはげめ

金次郎は十二の時から父にかはつて川ぶしんに出ました。しごとをすまして、家へか



へりますと、わらちをつくつて、あくる朝しごとばへ持つて行きまして。そして人人に「私はまだ一人前のしごとが出来ませんので、みなさまのおせわになります。これはお

れいのしるしでございます。」といつて、そのわらちをおくりました。

その上金次郎は人人の休んでゐるひまにも土や石をはこんで、力のかぎりはたらきました。それでかへつて、おとなよりもたくさんしごとをしたと申します。

第五 しんるゐ

金次郎が十六の時、母がびやうきにかかり

ました。金次郎は大
そうしんぱいして
色色かいはうしま
したけれども、とう
とうなくなりました。
金次郎はたのみ
にする母にわかれ、
二人の小さい弟とあと



にのこつてどんなになげいたでせう。
やがてしんるゐの人たちがよりあつて三
人のものが大きくなるまで、わけてあづか
ることにしよう。とさうだんしました。それ
で金次郎はまんべんといふをぢの家へ引
取られました。

第六 學問をつとめよ

金次郎はよくをぢのいひつけをまもり、い



ちにはちはたらいて、夜
になると、本をよみ、字
をならひ、さんじゆつ
のけいこをしました。
をぢが「夜學やがくのため
にあぶらをつかふのは
よくない。」といひまし
たから、金次郎はじぶ

んであぶらなをつくり、そのたねを賣つて
あぶらを買ひ、まいばんきやうしまし
た。をぢが又「本をよむよりは夜もうちのし
ごとをせよ。」といひましたから、金次郎は夜
おそくまでしごとをして、そのあとで學問
をしました。

金次郎は二十さいの時じぶんの家へかへ
り、せいだしてはたらいで、のちにはえらい

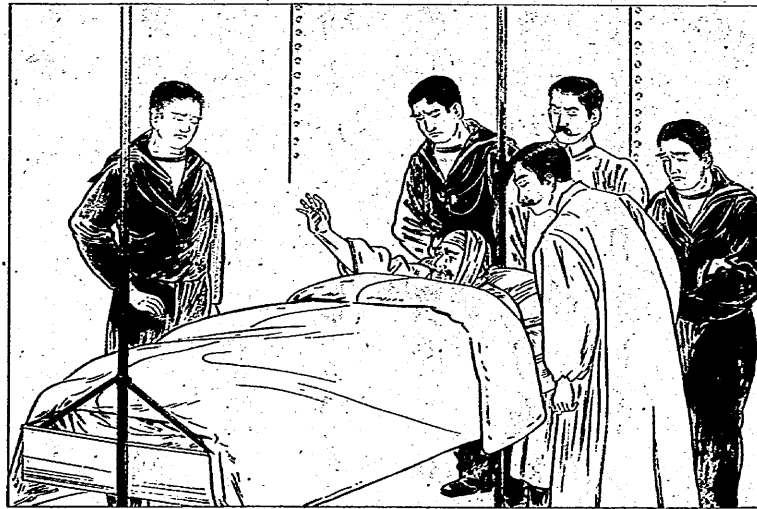
人になりました。

玉^{タマ}ミガカザレバ光ナシ、人學^チバザレバ智^チナシ。

第七 友だちはたすけあへ

かいぐん一とうするへい坂井^{さかい}定三郎^{ぢやうざうざう}は、ぐんかん^{ぐんかん}にゐた友だちがべんきやうのため^{おほさか}に大阪^{おほさか}へ行つたので、じぶんのきふれうの中^{なかつ}から時時金をおくつてたすけてやりま

した。めいぢ三十八年五月日本海^{かいはう}のいくさのあつた少し前にも、金をおくらうとしましたけれども、つがふがわるかつたので人からかりておくりました。間もなく定三郎



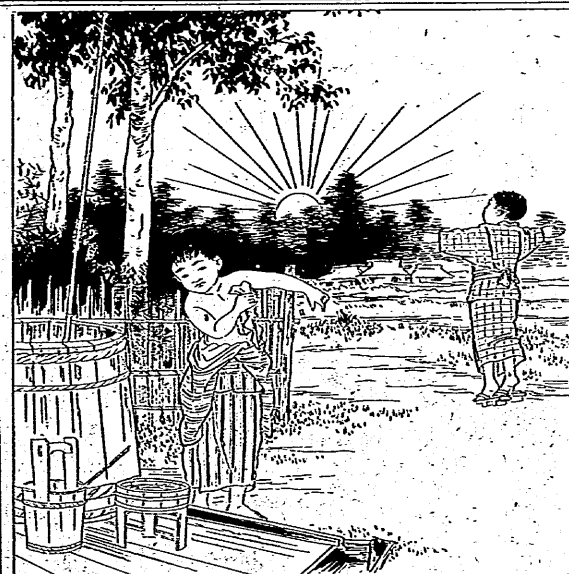
はいくさに出て重いきずをうけました。とてもたすかるまいと思ひましたので、そばにゐた友だちに、かりた金のしまつをたのんで、それきり氣がとほくなつてしまひました。しばらくすると、にはかに大きなこゑで大阪の友だちの名をよび「しつかりたのむぞ」といつて、そのままなくなりました。

第八 からだについてのころえ

伴信友は毎日朝起きた時と夜ねる時に、姿勢を正しくしてすわり、三四十べんもしんこぎふをし、又毎朝つめたい水であたまをひやしました。その外、朝ばん弓を引いたり、はをつぶした刀をふつたりして、よくうんどうしました。かやうに信友はからだをたいせつにしたので、年をとつてもぢやうぶで、たくさんの本をあらはすことが出来ま

した。

すべてからだをぢやうぶにするには、姿勢



に氣をつけ、うんど
うをおこたらず、着
物はせいけつにし、
ねむりやしよくじ
は、きそく正しくし
なければなりません

ん。又からだにあかをつけておいたり、うす
ぐらい所で物を見たりしてはなりません。

第九 めいしんにおちいるな

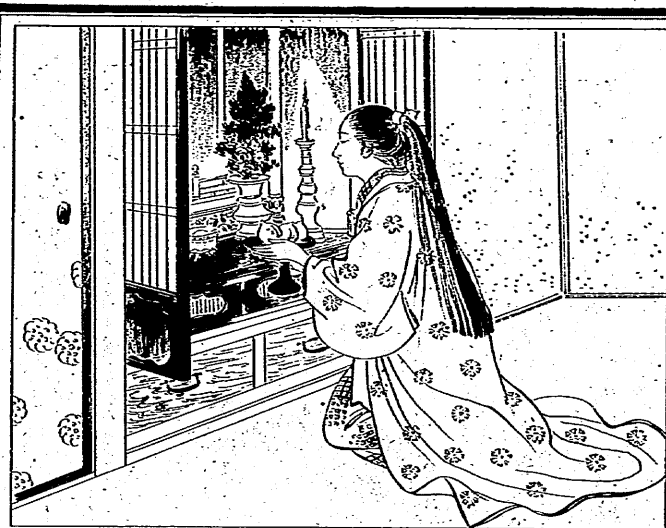
ある町に目をわづらつてゐた人があります。
した。めいしんのふかい人である所のお水
をいただいて、それを目にさしてゐました。
が、日日わるくなるばかりでありました。あ
る日しんるゐのものが見まひに来ておど

ろいて、むりにおい
 しやの所へつれて
 行きました。おいし
 やはよく見て、早く
 お出でになればよ
 かつたのに、今にな
 っては、とてもなほ
 りません。」とまうしました。



第十 そせんをたつとべ

稻生^{いなふ}はるはまい月一
 日十五日、その外そせ
 んの忌日^{きにち}には朝早く
 からおき、からだをき
 よめて、ぶつだんのさ
 うちをし、花をささげ、
 かうをたき、色色そな



へ物をして、つつしんでおまつりをしました。もし人からめづらしいくだものなどをもらふことがあるときつとぶつだんにそなへました。

第十一 ぎやうぎ

まつだらよしふき
松平好房は小さい時からぎやうぎのよい人で、かりそめにも父母の居られる方へ足をのばしたことはありませんでした。よそ

へ行くときは、そのことを父母につげ、かへつて来たときは、かならず父母の前へ出て、その日あつたことをくはしくはなしました。父母から物をいだくときは、ていねいにおじぎをしてそれを受け、いつまでもた



いせつに持つて居ました。又人が父母のはなしをすると、かならず居なほつてききました。

シタシキ中ニモレイギアリ。

第十二 けんそん

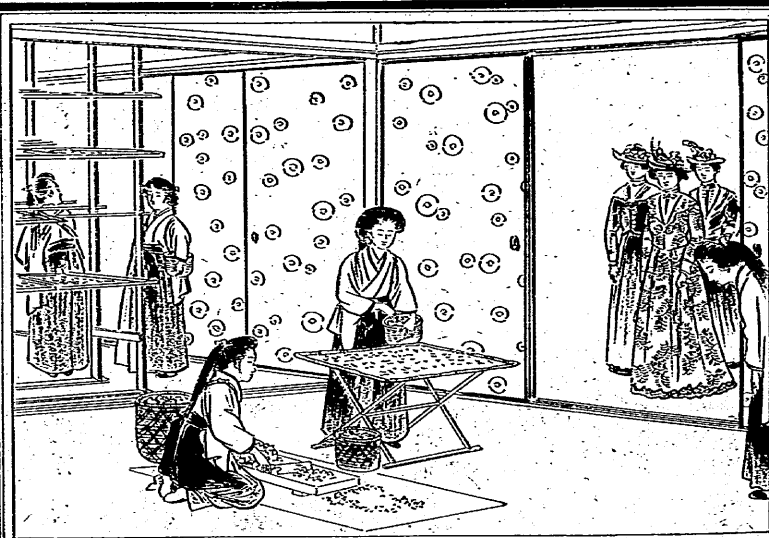
吉田松陰^{よしだしょういん}のでしに久坂玄瑞^{くさかげんずゐ}と高杉晋作^{たかすぎしんさく}といふ二人のすぐれた人がありました。玄瑞はおこなひをつつしみ學問にはげみまし

たので、松陰はつねに玄瑞をほめて居ました。晋作ははじめはべんきやうしませんでした。したが、後には心をあらためてべんきやうして大そり學問が進みましたから、松陰はことをきめるときに、多く晋作とさうだん



二十六
しました。玄瑞は晋作をほめて「高杉君はえらい人だ。じぶんはおよばない。」と言ひますと、晋作は「久坂君こそりつぱな人だ。じぶんはおよばない。」と言つて玄瑞をほめました。松陰は二人がたがひにけんそんしてほめ合つて居るのをきいて大そうよろこびました。

第十三 皇后陛下^{へいか}



皇后陛下はお小さい時からしつそにあらせられて、おめしものもはでな物はおもちひにならず、學校へおこひなされるにも、たいていはおあるきになりました。

まだ九條家くでうけにあらせられたとき、ある冬の朝早くおおきあそばしましたが、御うがひの湯がまだわいてゐませんでした。けれど、少しもおかまひなく、水のままおつかひになりました。人人はおそれ多いことに思つて、あくる朝はいつもより早くおきて湯をわかし、したので、多くの人人にくらうをかけるのは、きのどくなことである。』とお

ぼしめし、それから早くお湯をおつかひあそばすことをごゑんりよになりました。皇太子こうわうたいし妃ひにならせられてからも、かひをおかひあそばしたり、いくさの時にははうたいをおつくりになつて軍人にたまはつたり、その外ありがたいことがたくさんございます。

第十四 能久親王よしひさしんのう

能久親王

北宮はめいち二十八年五月臺灣たいわんの

ぞくを御せいばつ
なされるために臺
灣へおわたりにな
りました。おつきに
なつても、お休みに
なるやうな家がな
いので、砂の上にま

くをはり、そまつないすをおいて御座所ござしよと
しました。又御しよくじにはさつまいもの
むしやきをさし上げました。それからだん
だん軍をお進めになりましたが、へいしと
ともに大そう御なんきをなされ、御病氣ごびやうきに
おなりになつても、少しもおいとひなされ
ずおさしづなさいました。

ぞくはたいいてい平らぎましたが、南の方に

33頁

、

48頁

欠

三十二
またのこりのぞくがゐりましたので、その方へお進みになりました。そのとちゅう、又御病氣におかかりなさいました。ぐんいは「おとどまりになつて御やうじやうあそばされるやうに。」と申し上げましたが、親王は「わが身のため、に國のことをおろそかにすることは出来ぬ。いきのあるまでにつづける。」とおほせられ、きゆうくつなかごにのつて、な

よく兄につかへよ。と
書きました。又隆元へ
べつの書きものをわ
たして、あの書きもの
をまもりとして、家の
さかえをはかれよ。と
ねんごろにいましめ
ました。それで兄弟は



いつしよに名をならべた請書うけしよを父にさし出し、三人共同して父のいましめをまもつて行きます」とちかひました。

その後隆元は早く死んで、その子の輝元てるもとが家をつぐことになりましたが、元春隆景はよく元就のいましめをまもり、心を合せて輝元をたすけたので、毛利家は長くさかえることになりました。

第二十二 こうえきをはかれ

昔羽後うごの海べの村村では暴風ぼうふうが砂をふきとばして、家や田をうづめることが度度ありました。栗田くり定之丞ただのじやうといふ人がその害がいをふせがうと色色くふうしました。まづ海べの風のふく方にわらたばを立てつらねて砂をふせぎ、そのうしろにやなぎやぐみの枝をささせましたら、皆めをふくやうにな



五十二
 りました。そこでさらに松の苗木をうゑさせました。それがしだいに大きくなつて、つひにりっぱな林になりました。

定之丞は十八年の間このことにほね折り

ましたが、そのために風や砂のうれへがなくなつて麥粟^{あは}などの畑^{はた}も所所に開け、又しよりろやはつだけでも生ずるやうになりました。この地方の人人は今日までもそのおんをありがたく思ひ、定之丞のために粟田神社といふ社^{やしろ}を立てて年年おまつりをいたします。

第二十三 じせん

昔大ききんのあつた時、羽前の鶴岡に鈴木
 今右衛門といふじぜんの心のふかい人が
 ありました。田畑をはじめ諸道具まで賣つ
 て多くの人をたすけました。今右衛門のつ
 まも心だてのよい人で、ほどこしをするた
 めに着物るゐを賣りはらひ、はれの衣裳が
 二つだけのこつてゐましたが、着がへがな
 くなつて外へ出ることが出来なければ、く



しやかんざしの入用
 もない。これらの物を
 金にかへ、もつと多く
 の人をたすけませう。
 といつて、はれの衣裳
 も、くしかんざしも、皆
 皆賣つてしまひまし
 た。

今右衛門ふうふにこの時十二さいになる
むすめがありました。ある日同じ年ごろの
女の子が物もらひに來ました。母はそれを
見て、むすめに「あの子はひとへ物一枚でふ
るへてゐます。おまへの着てゐるわたいれ
を一枚やりませんか」といひましたら、むす
めはすぐによい方のわたいれをぬいで、そ
れをやりました。

複七三四

複七三四

ワガ身ヲツメツテ人ノイタサヲ知レ。

第二十四 よい日本人

私どもはつねに天皇陛下、皇后陛下の御恩
をかりむることのふかいことを思ひ、忠君^{ちゆうくん}
の心をはげみ、法令を重んじ、君のため國の
ために、忠ゆうなはたらきをして、臣民^{しんみん}のつ
とめをつくさなければなりません。
又おやの恩のふかいことを思ひ、父母にか

うかうをつくし、そせんをたつとび、兄弟な
かよくし、しんるゐの人によくまじはらな
ければなりません。

友だちにはしんせつにしてたすけあひ、人
にまじはるには、けんそんで、ぎやうぎよく
し、しやうちきで、やくそくをまもり、人から
うけた恩をわすれず、人と共同し、こうえき
に力をつくし、じぜんの心もふかくなけれ

ばなりません。

その外學問にせいだし、めいしんにおちい
らないやうにし、からだのけんかうにきを
つけ、しごとをはげまなければなりません。
これらのころえをよくまもると、よい日
本人になることができます。

K130.11-2-3.42a

大正四年二月廿八日翻刻印刷
大正四年三月二十日翻刻發行

著作權所有

著作兼
發行者

文部省

尋常小學修身書
複式編制學校第三四學年兒童用乙

定價金六錢
大正四年度臨時定價金八錢

大正四年三月三日
文部省檢査濟

發賣所

翻刻發行
兼印刷者

東京書籍株式會社

代表者

原亮一 郎

印刷所

東京市小石川區指ヶ谷町百三十六番地
東京書籍株式會社工場

東京市日本橋區新右衛門町十六番地
株式會社
國定教科書共同販賣所

